

電子版

西日本支部通信

第28号 (通巻128号)

Nishi-Nihon Branch Newsletter No. 28
The Musicological Society of Japan

発行：日本音楽学会西日本支部
〒662-8501
兵庫県西宮市上ヶ原一番町1-155
関西学院大学文学部美学研究室気付
E-Mail: msjwest00@gmail.com
TEL: 0798 54-6212

巻頭言

支部長 小石 かつら

早いもので、もう2025年度も終わろうとしております。10月以降、西日本支部では3回もの例会を開催することができました。3回とも性格のまったく異なる内容で、その方向性の多様さだけでも、素晴らしいことだと思います。ご参加くださったみなさま、発表や企画に関わってくださったみなさまに御礼申し上げます。

10月の例会では、カタルーニャ高等音楽院のアドルフ・プラ氏をお迎えし、モンポウの作品世界についてご講演いただきました。11月の例会では、博士論文発表、研究発表に加えて、「総合大学における音楽と音楽学」をテーマとしたシンポジウムを行いました。これには私自身も参加したのですが、シンポジウムの場での熱い議論、そして夜遅くまで大人数での懇親会を持つことができました。思考の幅の広がりを実感し、「これぞ研究会」という経験でした。12月には、日本ポピュラー音楽学会との合同で、ワークショップを開催しました。

それぞれの場で共有した問題について、本支部通信を通じてみなさまに伝われば幸いです。また、いずれも、その内容は、まだまだ解答を得られる状態ではなく、さらなる議論が望まれます。今後も引き続き考えてゆくことができるよう、みなさまのお力添えをいただきたく思っております。来年度も、よろしく願います。

2026年3月15日

□ 目 次 □

| | |
|--|------------|
| 支部長 巻頭言 | ・ ・ ・ ・ 1 |
| 定例研究報告 西日本支部第 65 回 (通算 416 回) 定例研究会 ＜講演＞ | ・ ・ ・ ・ 3 |
| 1. アドルフ・プラ (カタルーニャ高等音楽院教授) モンポウとその作品についての考察 報告：内藤多寿子 | |
| 定例研究報告 西日本支部第 66 回 (通算 417 回) 定例研究会 | ・ ・ ・ ・ 5 |
| ＜博士論文発表＞ | |
| 1. 杉山恵梨 (大阪大学) 両大戦間期 (1919～1939 年) フランス、スイスにおける 18 世紀以前の宗教声楽作品 レパートリー——二つのスコラ・カントルムにみる古楽の発生史 要旨：杉山恵梨 報告：筒井はる香 | |
| ＜一般発表＞ | |
| 2. 堀口利沙 (九州大学) 1860 年から 1939 年にかけてのフランス歌曲における日本人女性像の変遷 要旨：堀口利沙 報告：藤井花鈴 | |
| ＜シンポジウム＞ | |
| 3. 発表者：上田泰史 (京都大学)、船木理悠 (同志社大学)、木村遥 (成城大学) コーディネーター：小石かつら (関西学院大学) 総合大学における音楽と音楽学——今日の教育現場からその役割を問う 報告：松井典子 | |
| 定例研究報告 西日本支部第 67 回 (通算 418 回) 定例研究会 | ・ ・ ・ ・ 9 |
| ＜ワークショップ＞ | |
| 1. 西田紘子 (九州大学／コーディネーター)、小川博司 (関西大学名誉教授)、 増田聡 (大阪公立大学)、大寫徹 (玉川大学)、小川将也 (九州大学)、 討論者：忠聡太 (福岡女学院大学) ポピュラー音楽研究と音楽学研究：学会と領域の関係性をめぐって 報告：船木理悠 | |
| 編集後記 | ・ ・ ・ ・ 17 |

□定例研究会報告□

■西日本支部 第 65 回 (通算 416 回) 定例研究会

日 時 : 2025 年 10 月 25 日 (土) 15:00-17:00

会 場 : 同志社女子大学今出川キャンパス 楽真館 R102

例会担当 : 椎名亮輔 (同志社女子大学)

司 会 : 椎名亮輔 (同志社女子大学)

内 容 : アドルフ・プラ (カタルーニャ高等音楽院教授)

講演「モンポウとその作品についての考察 Reflexiones sobre Mompou y su obra」

講演

モンポウとその作品についての考察

アドルフ・プラ

レポーターによる報告

内藤多寿子

2025 年 10 月 25 日、同志社女子大学で、カタルーニャ高等音楽院のアドルフ・プラ Adolf Pla 氏による講演会「モンポウとその作品についての考察 (原題: Reflexiones sobre Mompou y su obra)」が開催された。主催は椎名亮輔氏 (同志社女子大学)、通訳は内藤多寿子 (同志社女子大学) が務めた。ピアニストであると同時に、20 世紀スペインの作曲家フラダリック・モンポウ Frederic Mompou (1893—1987) 研究を専門とするプラ氏は、豊富な画像資料と録音資料、そして独自の見解を交えながら、モンポウの生涯とピアノ作品を中心に紹介した。直前に開催が決定し、告知を行なった影響か、参加者は 10 名程度であった。しかし、学会員・非会員の別を問わず研究者から演奏家までが会場に集い、講演者の話に熱心に耳を傾けた。

冒頭、プラ氏がカタルーニャ語で講演会開催の挨拶と謝辞を述べた後、講演が始まった。講演は三部に分かれた。第一部はモンポウの幼少期の性格と興味関心についてであった。プラ氏によれば、モンポウは幼少期から非常に変わった性格をしており、無口で、静かで、よく物思いにふける子どもだった。当時、モンポウが唯一不安を抱いていたことは「大人になること」だった。なぜなら、自身の家族が責任ある重要な仕事を行なう際、真面目で不安げな表情を顔に浮かべているのをモンポウは知っていたからである。一方、道路清掃人や辻音楽師たちはいつも精神的に自由で、リラックスした、満足気な表情をしているようにモンポウには思われ、これらの人々に魅力を感じていた。そして、この経験がモンポウの初期ピアノ作品《内的印象 Impresiones íntimas》(1911—1914/1959)、《郊外 Suburbis》(1916—1917)、《子どもの情景 Scènes d'enfants》(1915—1918)、中期以降のピアノ作品《ガリシアの荷馬車 Carro de Galicia》(《風景 Paisajes》[1942—1960] 第三曲)、声楽作品《口のきけない男児 El niño mudo》(1955)、合唱作品《盲目の牝牛 La vaca ciega》(1978) へ反映された。またプラ氏は、ピアノ作品《魔法の歌 Cants mágics》(1917—1919) や《魅惑 Charmes》(1920—1921) から、人間が持つ目に見えない力をモンポウが信じていたとうかがえること、そして、モンポウが 1920 年代にパリで名声を獲得した際、これらの作品が重要な役割を果たしたことも言及した。

第二部は青年期のモンポウに関してだった。最初、ピアニストを目指していたモンポウは、1909 年にフォーレの《ピアノ五重奏曲》第一番 (作品 89) を聴いたのをきっかけに作曲へ目覚めた。そして、1921 年にパリで作曲家としてデビューした後、エミール・ヴュイエルモーズ Émile Vuillermoz (1878—1960) が書いた記事をきっかけに地位を確立した。プラ氏は、モンポウが「海岸地区 Barri de platja」と名付けた和音 (報告者注: fis, c¹, es¹, as¹, d² で構成される和音) をメモした自筆資料を提示しながら、モンポウの初期の創作活動を紹介した。そして、和音「海岸地区」が「金属和音」と呼ばれる和音の一種であること、バルセロナの浜辺や工場地帯で聞いた音からインスピレーションを受けて生みだされ、モンポウの作品の基礎となった和音であることに言及した。加えて、プラ氏は、この和音が対立する協和音と不協和音を統合し、かつシンメトリーとアシンメトリーをも統合する和音である、という独自の見解を示した。

第三部は 20 世紀の西洋音楽史におけるモンポウの位置づけがテーマだった。プラ氏はかねてよりスペインの建築家アントニ・ガウディ Antoni Gaudí (1852—1926) とモンポウに共通点があると考え、研究を行ってきたが、ここで特に興味深かったのはモンポウの最後のピアノ作品《沈黙の音楽 Música callada》(1959—1967) 第一巻第一番の冒頭に記された演奏指示 “Angélico (天使のような)” についての解釈だった。プラ氏によれば、ガウディの著作の中に「天使」を扱った項目があるという。そこでは、天国と地獄は同じ次元に存在する一方、天使はより高次元の存在として記述される。このガウディの解釈が《沈黙の音楽》の演奏指示にも適用できるのではないかと、というのがプラ氏の意見だった。

最後に、フロアから二点質問があった。一点目はモンポウと同時代のフランスの作曲家、特にエリック・サティ Erik Satie (1866—1925) との関連性を問うものであった。モンポウがサティから影響を受けたことは有名な話であるが、モンポウの作品は 20 世紀ではなく、21 世紀になって初めて世の中に受け入れられた点でサティと異なる、というのがプラ氏の回答だった。実際、モンポウ作品の演奏機会は 21 世紀以降格段に増えている。二点目はモンポウとスペインの民俗音楽との関連性を問うものであった。プラ氏からは、モンポウがピアノ作品《歌と踊り *Cançons i danses*》(1921—1977) の中でカタルーニャ民謡を使用していること、また 19 世紀以降、スペインでは民俗音楽にインスピレーションを受けた作品がさかんに作られ、土壌が育まれていたことなどが説明された。

モンポウと同じカタルーニャ出身者としての立場から資料を読み解き、演奏活動を通して自身の研究成果を発信し続けているプラ氏の講演は、日本人では考えつかないような着眼点も多く、新しい発見に満ちた有意義な時間だった。

■西日本支部 第 66 回（通算 417 回）定例研究会

日 時 : 2025 年 11 月 15 日（土）14:00-17:30
会 場 : 同志社女子大学今出川キャンパス 純正館 S308
例会担当 : 椎名亮輔（同志社女子大学）
司 会 : 椎名亮輔（同志社女子大学）
内 容 : 博士論文発表・研究発表・シンポジウム

博士論文発表

両大戦間期（1919～1939 年）フランス、スイスにおける 18 世紀以前の宗教声楽作品レパートリー
——二つのスコラ・カントルムにみる古楽の発生史——

杉山恵梨

発表者による要旨

杉山恵梨

執筆者は、2025 年度に大阪大学へ提出した博士論文に関する発表を行った。本研究は、両大戦間期における古楽発生の歴史について、パリおよびバーゼル・スコラ・カントルムの声楽レパートリーに焦点を当て、考察したものである。

パリ・スコラ・カントルムは、ルネッサンス時代以前のカトリック教会の典礼音楽を、歴史主義的価値観に基づき、古楽の普遍的レパートリーとして提示する役割を担っていた。そして、このレパートリーは国境を越え、バーゼル・スコラ・カントルムにおいても受容され、定着していった。両大戦間期に共有されたそのレパートリーは、グレゴリオ聖歌やパレストリーナの声楽作品を代表とする、ルネッサンス時代以前のカトリック教会の典礼音楽であったことが明らかとなった。

このレパートリーに、パリ・スコラ・カントルムの学校長であったヴァンサン・ダンディは、J. S. バッハのプロテスタント教会音楽の声楽作品を加えていた。ダンディは、作品に歴史性と作曲家固有の様式を認めようとしており、こうした美的観念は、当時のフランスにおけるグレゴリオ聖歌の原点研究などに向けられていた関心とは一線を画すものであった。

このような特殊なレパートリーの構成は、バーゼル・スコラ・カントルムにおいても確認された。同校の学校長であったパウル・ザッハーによって加えられた、スイスの作曲家アルダーやゼンフルの宗教声楽作品が、その特殊なレパートリーである。

一方、同時期のドイツ語圏、とりわけドイツにおいては、バロック時代の作品に向けられた関心の高さが顕著であった。ドイツのバロック作品を含む「古楽」の演奏実践という、当時新しく概念は、ナチズム体制下において都合よく利用される側面も有していた。20 世紀前半のワンダーフォーゲル運動において、ドイツのバロック時代の作品が頻りに用いられていたことが、その一例である。これらの作品は、ナチズム下において国粹主義的思想を扇動する役割を、少なからず担っていた。

しかしながら、ザッハーは歴史的価値観に基づく立場から、ドイツの古楽作品と前述のスイスの古楽作品とを同列に扱い、同様に演奏プログラムへ組み込んでいた。このような演奏実践は、ナチズム下で一時的にアーリア化されていた古楽を奪還し、それに対抗する文化的試みとして位置づけることができる。

20 世紀前半という社会的・国際的情勢が不安定な時期において、いずれのスコラ・カントルムにおいても、自国の歴史的な脈に即したレパートリーが展開されていた。フランスおよびスイスにおけるこの時期の古楽実践は、芸術的営為であると同時に、文化的ナショナリズムの一表出形態でもあったといえる。

レポーターによる報告

筒井はる香

本発表は、両大戦間期における古楽の発生史を、パリ・スコラ・カントルムとバーゼル・スコラ・カントルムの比較を通して考察したものである。具体的には、両スコラ・カントルムにおけるプログラムの整理とその検討を中心に行われた。

古楽実践が本格化した 20 世紀前半において、二つの教育機関は共に 18 世紀以前の宗教声楽作品の演奏と教育の中心地となった。パリ・スコラ・カントルムでは、グレゴリオ聖歌などカトリック教会の典礼音楽に加え、J.S. バッハの宗教声楽作品もレパートリーに据えられた。発表者によれば、後者は創設者ヴァンサン・ダンディの美的観念によるものであり、彼の古楽演奏実践の目的は必ずしも典礼音楽の復興のみに向けられたものではないという。

一方、20 世紀前半のドイツとバーゼルにおける古楽の演奏実践についての考察では、まずドイツのバロック時代の作品や古楽器が用いられたワンダーフォーゲルとナチズムとの親和性が述べられた。続いて、パウル・ザッハーが創設したバーゼル・スコラ・カントルムの演奏会では、中世・ルネサンス時代のモテットや、ドイツのバロック時代全般の声楽曲が多く取り上げられていた。また同校で行われた講座や演習では、スイスの古楽作品を家庭音楽に関連させて行う演奏実践も見られる点が特徴として挙げられた。

本発表は博士論文の各章を要約する形で行われ、全体の枠組みを把握できた。両スコラ・カントルムのレパートリーの検討を通して、各国の歴史的な文脈に即する作品が展開されたことや、創設者の意向がその選択に大きく反映されていたことが示された。興味深かったのは、パリで演奏されていたパレストリーナの楽譜が 1930 年代のバーゼルに共有されていたことから、両大戦間期の古楽実践はパリからバーゼルへのレパートリーの受容という側面を持ち、後に普遍的な古楽のレパートリーに位置づけられたという指摘である。

フロアからは、ランドフスカのバーゼルの古楽実践における役割や、両スコラ・カントルムにおけるレパートリーの共通性、スイスの作曲家の作品を演奏することがなぜ古楽の「アリア化」に対抗する文化的試みに位置付けられるのかといった質問があった。最後の質問に関して、歴史的な文脈のなかで古楽実践を読み解く視点は興味深い、説明不足による論理の飛躍が否めない点もあった。とはいえ、膨大なプログラム資料の整理に基づく実証的な分析には説得力があり、今後の研究のさらなる深化を期待している。

研究発表

1860 年から 1939 年にかけてのフランス歌曲における日本人女性像の変遷

堀口利沙

発表者による要旨

堀口利沙

本稿では、博士論文『1860 年から 1939 年にかけてのフランス音楽におけるジャポニスム』から抜粋した、「フランス歌曲における日本人女性像の変遷」の研究発表を考察する。この時期にフランスで出版された日本を題材とする約 200 点の楽譜を調査対象とし、フランス歌曲における日本人女性像の変遷を、ジャポニスム受容の歴史的な文脈とともに分析した。

日本開国以降、フランスでは日本文化への関心が急速に高まり、多くの旅行記や文学作品が日本人女性を異国的で魅惑的な存在として描いた。特に、ピエール・ロティの『菊夫人』(1887) は、日本人女性像のステレオタイプ化に大きな影響を与え、「ムスメ (La Mousmé)」という呼称が普及していった。またこの小説の影響は、アンドレ・メサジェやプッチーニのオペラへも波及した。さらに、ジュディット・ゴティエやサン＝サーンスら知識人・芸術家らは日本文学や音楽に触発され、フランス文化圏における日本イメージの形成に寄与した。

歌曲においては、1860～1914 年の第一期が「ジャポネズリー (日本趣味)」に相当し、五音音階や着物姿の女性像といった表層的な日本イメージが中心であった。ルイ・ガンヌ《ラ・ムスメ》に見られるように、日本人女性は美しさと恋愛幻想の対象として描かれ、作曲技法も西洋的枠組みに留まった。これに対し、1920～1930 年代の第二期「ジャポニスム」では、日本詩の翻訳普及に伴い、より内面的・情緒的な日本女性像が創出されるようになる。ポール＝ルイ・クシュによる俳句の紹介や、ミシェル・レヴォンによる『源氏物語』や『百人一首』などの古典文学翻訳は、フランス歌曲に新たな題材を提供した。ジョルジュ・ミゴー《日本の七つの小さな絵》やアレクサンドル・タンスマン《8つの日本歌曲》では、詩に描かれる感情や自然描写が音楽的に細やかに反映され、五音音階の使用は暗示的なものへとようになっていく。これらの作品の多くは女性の視点に基づき、日本人女性の内面や感情の機微が表現されている点に特徴がある。

両時期を比較すると、第一期が外面的・装飾的な日本像に依存していたのに対し、第二期の作曲家らは日本の詩を通じて、日常生活や自然と感情を融合させる日本独自の美意識を理解し、それを自身の音楽語法として昇華させた。この変化は、作曲家たちが単なる異国趣味を超えて、日本文化の思想を作品に取り込み始めたことを示しており、その結果、より繊細で複雑な女性像が描かれることとなった。以上より、フランス歌曲における日本人女性像は、幻想的なステレオタイプから、情感豊かな存在へと大きく変容したことが明らかとなった。

レポーターによる報告

藤井花鈴

本発表は、ジャポニズムの受容史を背景に、フランス歌曲で「日本らしさ」がどのように作られ、そこにどのような女性像が付与されたのかを、詩と音楽の連関から読み解くことを目的とした。導入では、開国以後の日本に関する記述の増加、文学領域における「ムスメ」語の流行、および1889年万博などを契機とした日本音楽への関心の拡大が整理され、日本関連の歌曲出版が急増する事実が提示された。

発表の中心は、歌詞の内容・作曲技法の観点から「第1期（1860-1910頃）／第2期（1920-1930頃）」を区別する点に置かれた。第1期は、着物姿のムスメ像、フランス人男性との恋愛、女性の美の讃美といった図式が反復され、日本的モチーフは異国的装飾として機能するにとどまることが示された。事例のガンヌ（Louis Ganne, 1862-1923）作曲《La Mousmé》では、五音音階など「それらしい」音素材は現れるものの、日本の音楽の理解に基づく引用というより、中国を含めた東洋一般をめぐる表層的な取り込みとして位置づけられた。

これに対し第2期では、翻訳された日本詩の導入によって、女性像は視線の対象としての「可憐なムスメ」から、情景や感情の担い手としての主体へと移行することが論じられた。ミゴ（Georges Migot, 1891-1976）作曲《日本の7つの小さな絵》の分析では、古典文学・和歌の翻訳テキストに対応して、音の配置を「引き離す」処理、重要箇所での加速やクレシェンド、五音音階の補完的使用、連符による時間感覚の描写などが具体的に指摘され、詩と音楽がより緊密に接続する作曲態度が確認された。タンスマン

（Alexandre Tansman, 1897-1986）の歌曲分析でも、女性視点のテキストと自然描写が旋律によって形象化される点が示され、第2期の作品群が単なるモチーフ消費を超えた「ジャポニズム」の段階にある、という発表者の結論は妥当性をもって提示された。

質疑では、翻訳された歌詞の「日本的」性格を前提にする場合でも、音楽面において日本の特徴を持つ音組織とはどのようなものか、さらなる分析の余地があるのではないかと、との指摘があった。これに対し発表者は、当時のフランスでは日本と中国が混同されやすいことを踏まえつつ、民謡聴取に基づくリズム感・長調短調の曖昧さ・琴の音色の模倣など、今後検討しうる音楽的指標を挙げ、本発表では歌詞側からの接近を優先したと応答した。また、第1期から第2期へ女性観が変化した要因として、日本詩の受容によって日本人女性への感性的理解が深まり、表象が洗練された可能性が示唆された。コメントとしては、《La Mousmé》における舞曲（マズルカ）の意味づけ、ならびにエキゾティシズム／プリミティビズムからジャポニズムへの移行をどこまで区別しうるか、といった概念整理の課題が今後の検討点として共有された。

シンポジウム

総合大学における音楽と音楽学——今日の教育現場からその役割を問う

発表者：上田泰史（京都大学）、船木理悠（同志社大学）、木村遥（成城大学）

コーディネーター：小石かつら（関西学院大学）

レポーターによる報告

松井典子

2025年11月15日（土）、同志社女子大学今出川キャンパス純正館にて、「総合大学における音楽と音楽学——今日の教育現場からその役割を問う」と題したシンポジウムが開催された。本シンポジウムでは、関西学院大学、同志社大学、京都大学の事例報告をもとに、総合大学の音楽学が抱える構造的な課題と、今後の展開や戦略について、深い議論が交わされた。事例報告を受けて、コーディネーターおよび発表者とフロア参加者との間で活発な議論が展開され、多様な視点に基づく質問や意見が次々と寄せられる非常に開かれた対話の場となった。

まず提起されたのは、音楽学の立ち位置が各大学の歴史的経緯によって規定され、その結果としてカリキュラムの自由度にも差が生じているという点である。関西学院大学や同志社大学では、音楽学は文学部美学芸術学科における哲学系の人文的枠組みの中で展開されてきた。一方、京都大学は音楽の専門教員が不在という状況から始まったが、2022年に上田氏が着任して以降、音楽教育を支える体制が整えられ、2025年度よりかけは芸術文化振興財団との共同事業を開始した。外部チャンネルを戦略的に活用することで、和声学やソルフェージュなど、音楽大学に近い実践的な科目を短期間で多数新設し、カリキュラムの拡大を実現したという点が特徴的である。この事例は、外部資源の導入と戦略的な企画力によって、伝統的な教育の枠組みを超える新たな展開が可能になることを示唆している。

また、総合大学の音楽関連科目が直面する課題は、学生層の現実と密接に結びついている。授業の多くが選択科目であり、受講学生の大半が他学部生であるため、関心はJ・PopやK・Popなどのポピュラー音楽に偏る傾向にある。同志社大学の事例が示すように、楽譜が読めない学生を前提とする場合、授業は西洋近代的な音楽観を歴史的に相対化する「広く浅い」内容を提示せざるを得ない。さらに、教員養成校に所属する参加者からは、学生が早期に「教師」という職業像を強く意識するあまり、音楽学が提供する人文学的な基盤、例えば、歴史的背景や教育内容を裏づける理論的、学問的根拠よりも指導法などの実践的な技術が優先されがちであるとの指摘があった。その結果、教育の内容が何に基づいているのか、あるいはどのような歴史的文脈を踏まえているのかが重視されにくいという、目的意識のズレが生じているのではないかという問題が提示された。こうした学問的な基盤の希薄化に対する懸念は、続いて議論された文部科学省のSTEAM教育への向き合い方にも関わってくる。

STEAMは、多目的スペースの整備や大型予算の獲得を可能にする有効な手段となり得ると評価された一方で、その前提として、人文科学に基づく基礎的な学問の土台が確立されていなければ、音楽と工学、あるいはAIといった分野横断的な融合は、実質的に成り立たないのではという強い懸念も示された。

議論の最後には、総合大学における音楽学の存在意義として、二つの役割が示唆された。一つは、音楽を通して西洋の近代化やグローバリゼーションの過程を分析し、現代社会の構造を理解するための学術的背景を提供する、普遍的な分析ツールとしての役割である。もう一つは、学生がサークル活動などで実践する音楽活動に対し、知識や学術的背景を提供することで、実践と理論の循環を生み出す役割を担うことである。

今回のシンポジウムは、総合大学における音楽学が、従来の学問的立ち位置と現代的なニーズへの対応という二つの課題に直面し、カリキュラムや学問の位置づけを再構築する転換期にあることを示唆した。議論すべきテーマは、大学の施設などのハード面から、学生のニーズに応えるカリキュラム構築、さらにそれを支える教員配置のあり方に至るまで多岐にわたることが改めて確認された。また、総合大学における音楽の存在意義、すなわち「なぜ音楽学が必要なのか」という根源的な問いについても、今後さらに検討と議論を深めていく必要があると言える。こうした問題意識をどのように掘り下げ、より広い視点へと発展させていくのが、次回の議論の重要な焦点となるだろう。特に、財団の支援を受け、大幅なカリキュラム改編を実現した京都大学の事例については、その実現までの具体的なプロセスを次回さらに詳しく共有されることが期待される。

■西日本支部 第 67 回（通算 418 回）定例研究会

日 時 : 2025 年 12 月 7 日（土）10:00-12:30
会 場 : 長崎県立大学シーボルト校 E109
例会担当 : 西田紘子（九州大学）
司 会 : 西田紘子（九州大学）
内 容 : ワークショップ

ワークショップ

ワークショップ「ポピュラー音楽研究と音楽学研究
——学会と領域の関係性をめぐって——

西田紘子（九州大学／コーディネーター）、小川博司（関西大学名誉教授）、
増田聡（大阪公立大学）、大鷲徹（玉川大学）、小川将也（九州大学）
討論者：忠聡太（福岡女学院大学）

レポーターによる報告

船木理悠

本例会は日本ポピュラー音楽学会（JASPM）との共催で、JASPM 全国大会のワークショップ B として開催された。登壇者で両学会員であるのは西田紘子氏（コーディネーター）、増田聡氏、大鷲徹氏、片方のみの会員は小川博司氏（JASPM）、小川将也氏（日本音楽学会）、討論者の忠聡太氏（JASPM）である。最初にコーディネーターの西田氏から企画の経緯、趣旨説明が行われ、JASPM と日本音楽学会の関係や両者の研究対象をどの様に捉えるかは定期的に議論されてきたが、現在ほどの様な状況なのかを問い、情報共有や相互理解に資することを目指したい旨が示された。

1 人目の小川博司氏は「JASPM 草創期から現在までを振り返る」という論題で、まず IASPM 日本支部の設立（1987）から、独立組織としての JASPM 設立（1990）の経緯や 80 年代以降の日本のポピュラー音楽研究の概況が紹介された。この中で、JASPM においては当初からテクノロジーへのこだわりがあったこと、また、近年の状況として事例研究が中心となり抽象度の高い理論的研究が少ない傾向にあるのではという指摘がなされた。更に、日本社会学会の場合との比較がなされ、社会学においては関連領域を包括する存在として日本社会学会が存在するのに対して、日本音楽学会はその様な位置づけとなっていないという構造的差異を指摘した上で、ディシプリンの重要性や各組織の間のジョイント、組織としての企画力の重要性が主張された。

2 人目の増田氏は「日本の音楽学とポピュラー音楽研究の学術的布置：1990 年代から現在までの変遷をめぐる個人的経験から」という論題であった。増田氏は JASPM 成立以降の世代として 90 年代以降のポピュラー音楽研究者のキャリア形成をめぐる状況を紹介し、その中で、この時期にポピュラー音楽研究が制度化されていき（JASPM 発足等）、大学院生がポピュラー音楽を研究可能な状況が成立したことが示された。また、この制度面の議論に関して、そもそも日本の大学内の音楽学の存在理由は義務教育に音楽が存在することにあり、これにより音楽学は大学教育制度内に位置を占めてきたと指摘された。そして、このことが大学制度改革や学際化による音楽学の制度的基盤の弱体化につながったが、ポピュラー音楽研究はこのような制度的基盤を持たなかったが故に、変革の影響を受けにくかったという見解が示され、音楽学とポピュラー音楽研究の関係を考える際にはこの制度上（構造上）の差異をも考える必要があると主張された。

3 人目の小川将也氏は「ドイツ音楽学と「ポピュラー音楽」という論題で、ポピュラー音楽研究がドイツ語圏の音楽学においてどの様に受け止められていたかを示すことにより日本の状況を相対化する視点の提示が試みられた。まず、ドイツ語圏におけるポピュラー音楽研究の制度化過程が紹介され、次に 80-90 年代にかけて出版された『新音楽学ハンドブック *Neues Handbuch der Musikwissenschaft*』シリーズ第 12 卷（1992）を中心に、ポピュラー音楽の音楽学側での扱いが紹介された。この文献では *die populäre Musik*（所謂ポピュラー音楽）と *Volks- und Populärmusik*（民衆音楽／民俗音楽）が使い分けられており、ドイツ語圏では *Volksmusik* と *populäre Musik* の関係（前者が後者を包摂するのか、両者を分けて捉えるのか etc.）が問題だったことが指摘された。そして、このポピュラー音楽という語の位置づけに関するドイツ的な問いを考えることは、日本でも音楽学とポピュラー音楽双方の研究者にとって有益なものではないかということが示唆された。また、最後にドイツ語圏における現在の領域区分についても紹介がなされた。

4 人目の西田氏からは、実際の大学教育環境の事例として所属先の九州大学大学院芸術工学研究院音響設計部門における状況が紹介された。この部門の場合、デザイン分野や学際的、文理融合といった特徴があり、講義でも多様な領域と方法論が求められ、指導学生の研究対象もクラシック音楽とポピュラー音楽どち

らも有る（ポピュラー音楽が6-7割）とのことである。従って、学生の研究発表の場も日本音楽学会とJASPMの両方を状況によって使い分けており、研究対象によって発表学会を選択する訳ではないが、方法的な面から、コンテンツ分析や理論史は音楽学会、社会調査等はJASPMといった選択をする場合が多いとの紹介がなされた。この事例を通じて、研究の対象や方法は所属先の環境によっても変化する可能性があることや、両学会に横断的に関わる場合の状況が示された。

5人目の大寫氏は「音楽研究における「専門」と「学際」の接続を考え直す」という論題で、「認識論的惰性」というフィリップ・タグの言葉を出発点として議論が展開された。この言葉は、音楽学とポピュラー音楽研究双方が思考の枠組みを更新せず両者の断絶が続く状況を批判しているとのことだが、これを踏まえて発表では以下の問題提起がなされた。まず、音楽学とポピュラー音楽研究の関係を考える上で両者の前提の違いを意識すべきではないかという点である。すなわち、前者が固有のディシプリンを有する領域であるのに対し、後者は多様なディシプリンが交差する領域であるという前提の違いである。また、この違いによって両者の認識にズレが生じている点も指摘された。すなわち、音楽学の立場はポピュラー音楽を音楽研究の一分野と認識するのに対し、ポピュラー音楽研究の立場は領域を構成する多様なディシプリンの一つとして音楽学を認識するという点である。従って、音楽学とポピュラー音楽研究の共同や大学内の制度設計を考える際も、この前提の違いや認識のズレを踏まえる必要があるというのが大寫氏の問題提起であった。

これらの発表に対して討論者の忠氏からは、音楽を語る際の言語体系の違いとして音楽学、ポピュラー音楽研究、音楽教育学、あるいはその外側を考えることができるのではという問いかけがされ、議論が展開されていった。また、フロアも交えた議論では、特にディシプリンの問題や、扱うジャンルの境界（ポピュラー音楽とは何か？）を中心として活発な意見交換や情報交換が行われた。

紙幅の関係でこれ以上詳細な内容をレポートできず残念であるが、上記以外にも多様な議論が行われワークショップは盛会に終わった。ただし、今回は日本音楽学会からの参加者が極めて少なく、ポピュラー音楽研究側の議論が中心であった。今後、音楽学側でも同様の企画が行われることが望ましいだろう。

□ 編集後記 □

『西日本支部通信』第 28 号（電子版）をお届けいたします。今号には、第 65 回定例研究会の報告、第 66 回定例研究会の発表要旨と報告、そして第 67 回の報告が収録されています。要旨や報告をお寄せいただいた発表者とレポーターの皆様に、厚く御礼を申し上げます。また、編集幹事の西澤忠志さんのすばやい仕事ぶりにはいつも本当に助けられています。感謝!!

さて、前号の編集後記でも取り上げました日本音楽学会西日本支部メーリングリスト（msj-k）につきまして、どなたからも問い合わせやご意見は寄せられませんでした。立ち上げに関わっていた私としては複雑な気持ちではあるものの、役割を終えたものを後片付けすることも与えられた仕事だということで、粛々と始末をつけたいと思います。

今後とも日本音楽学会西日本支部の活動に、ご期待・ご協力いただけましたら幸いです。最後に、各種学会関連情報のアクセス方法についてお知らせします。（I）

FILE

西日本支部通信

年に 2 回、PDF で発行され、西日本支部のホームページより随時閲覧可能です。個々のご事情で、紙面版の送付をご希望の会員は支部事務局にご相談ください。

MAIL

日本音楽学会 Information Mail

学会本部より毎月 1 回、各支部の例会、支部横断企画、研究発表奨励金など、多様な情報が送信されています。登録ご希望の方は、日本音楽学会本部事務局 office (at) musicology-japan.org 宛に、件名を「インフォメーションメール登録希望」としたメールを送って下さい。

日本音楽学会西日本支部メーリングリスト（msj-k）

こちらのサービスは 2026 年 3 月に停止する運びとなりました。1990 年代の関西支部時代にルーツをもつ支部会員メディアでしたが、ここ数年はほぼ利用がないので、その役目を終えたと判断しました。これに関するお問い合わせは、今田健太郎委員 (imada_ke@ta.rdy.jp) までお寄せください。

WEBSITE

日本音楽学会 <http://www.musicology-japan.org/>

日本音楽学会西日本支部 <https://msj-west.com/>

当通信へのご意見・ご質問、ならびに原稿掲載のご希望がございましたら、編集担当委員までご連絡（連絡先は末尾に記載）ください。あわせて、本部・支部の事務局等に宛てて原稿をたまわる折、PC の記号の使い方について、以下ご参考くださいますと幸いです。

- ・ 以下の記号は、ウェブサイト上で適切に表示されない場合があります。
文字内の補助記号（ウムラウトやアクセントなど） / 半角カタカナ
文字装飾（丸付き文字や全角データとしてのローマ数字）
- ・ 文中に傍点や書式設定（ゴシック・イタリックなど）の設定をなさりたい場合は、メール本文でなく、Microsoft Word のファイルに記入して、メールに添付してください。

日本音楽学会『西日本支部通信』第 28 号

発行者：日本音楽学会西日本支部

事務局：小石かつら（西日本支部長）

〒662-8501 兵庫県西宮市上ヶ原一番町1-155 関西学院大学文学部美学研究室気付

E-Mail: msjwest00@gmail.com TEL: 0798-54-6212

編集者：今田健太郎（2025 年度編集委員）

〒583-8501 大阪府羽曳野市学園前3-2-1 四天王寺大学文学部

E-Mail: imada_ke@ta.rdy.jp